

12月号から2月号までの3回にわたり、大口市の昔話を紹介します。

大口市の昔話 ①

山姥物語

むかしむかしのことでした。

都では応仁の乱が始まり、世の中が乱れ、百姓たちの一揆が起こり、人々の生活は不安定なものでした。また妖怪たちもこの時とばかり、都や山里に出没し、人々を恐怖に陥れた時代でもあったのでした。

さて、この頃、尾張羽黒村に福富新蔵と云う郷土が住んでいました。この男は武芸の達人で狩猟を好み、野山をかけめぐるのが日課でした。ある月の美しい夜のことでした。月のあかりに誘われる様に羽黒川を上り、本宮山で狩りをしておりました。

「今宵はなかなか獲物が現われないなあ、どうした事か？」とひとりごとをいいながら、とうとう本宮山の頂上まできてしまいました。ちょうど祠（いひだ）の前にさしかかった時のことです。あの明るかった月がまたたく間に黒い雲におおわれ、あたり一面暗闇になってしまいました。

と、そのとき拝殿の前に何か動く気配がしました。新蔵は目をこらしよく見ると、身の丈は3メートルもあろうか、異様な身なりの大女が髪をふり乱し、こちらをジロリとにらんでいたのです。



郷土のおおぐちに伝わる昔話のひとつ、「山姥物語」は、現在の大口市だけでなく、犬山市や岐阜県各務原市も舞台となる、壮大な物語です。

山姥にまつわる昔話は、全国各地に残っていますが、一か所におさまらず、さまざまな場所が舞台となり一つの昔話をつくっているのは、あまり例がありません。

「山姥物語」を記した史料や書籍はいくつもあります。古いものでは江戸時代にさかのぼるものも。しかし、史料や書籍により、物語の内容が微妙にちがっていたりします。

「昔話」のため、おおよその内容は同じでも、記したものの、伝え方などによって微妙にちがうのは当然ですが、この「山姥物語」の場合、どのように成立して今に至るのでしょうか？ 実は、それぞれの場所で伝わっていた伝承が、概ね江戸時代の中頃以降に「山姥」をキーワードとして、一つの物語にまとめられた...といわれています。

具体的には、本宮山に山姥が住む話、福富新蔵の祖先が鎌倉時代の武将である梶原景時（かじわらかげとき）に従って羽黒に落ち着いた話、「入鹿」という地名にまつわる伝説と現在の入鹿池付近にあった地名である「銚子ヶ口（ちようしがぐち）」に住む大蛇を退治した話、小池家の由来、徳林寺の縁起、芋ヶ瀬池（あがせいけ）にまつわる竜女の話...これらの各地域で伝わる伝承が、山姥とその血によって一つに結びつけられたと考えられています。

そして、この地に伝わる「山姥物語」の特徴としてもう一つ挙げられるのは、山姥が恐怖の対象として描かれているだけでなく、人間に化け、母親としての側面を見せていることです。全国のさまざまな土地で伝わる山姥は、山奥に住んでいて、道に迷った旅人を家に招き、ちよつとをふるまい、満足して眠った旅人を取って食べてしまふ...そんな老女の妖怪、鬼女である伝承が多いです。

それとは反対に、人間に幸福を授けたり、五穀豊穡（ごこくほうじやく）を授ける福の神のよ

「さては、これが噂の山んば！生かしておいてはためにならん」と、弓をとり、矢をつがえ、力を限りに矢を放ったのでした。

「ギャーアー」

「やったあ」

と新蔵が近づこうとすると、みるみるうちに本宮山はうなり声をあげ、社殿の灯明はかき消え、雲や霧がたちこめ新蔵は身動きがとれなくなっていました。

暗闇の中で新蔵は、ただただ神仏に祈り続け、夜が明けるのを待ったのでした。

やがて日が昇り明るくなった社殿に近づいてみると、あたり一面には黒々とした血がしたたり落ちていたのです。

「この血をたどれば山んばの家がわかる」新蔵はひたすら血の跡を追いかけてました。

するとこの血の跡は余野の里、小池与八郎の門前まで続いていたのです。

「やや、これはなんと、我友の屋敷前ではないか。ごめんだされ与八郎殿」

「おやおや、これは新蔵殿。朝早くからどうなされましたか？」

「昨夜、本宮山で山んばをしとめましたが、



うな性格を持ったたり、足柄山の金太郎が山姥の子どもという話に代表されるように、母親としての性格を持つ山姥の伝承も全国に残っています。

この地域の「山姥物語」は、新蔵を襲う怖い山姥であるとともに、小池与八郎の妻であり、一人の子どもの母であるという、2つの側面を持っている点特徴です。これも先程述べたように、元々は別の伝承であった可能性が考えられています。

では「山姥物語」において大口町内が舞台として登場する、余野の里（現在の余野）の徳林寺について紹介いたします。

徳林寺は、寺伝によると1294（永仁2）年に、尾張国余野村に住む小池与八郎貞宗が、亡き母の供養のために建立したとされています。この時は「空母山徳蓮寺」という真言宗の寺院でした。この

内容が、「山姥物語」に反映されたといわれています。徳蓮寺はその後、度重なる兵火により寺院が荒廃し、衰退してしまつたそうです。1469（文明元）年、小口城を築いた織田遠江守広近は、荒れ果てた徳蓮寺と、塔頭であった4つの寺をあわせ、「大龍山徳林寺」と改称したそうです。その時、美濃国岐阜の瑞龍寺から、

現在の扶桑町南山名で生誕した臨済宗の高僧である悟溪宗頓禅師を招いて開山したといわれています。しかし、1584（天正12）年



▲徳林寺本堂



▲徳林寺中門



▲徳林寺山門



徳林寺

大口町

逃げられましてな。血の跡を追ってきました所、こなたの門前までたどりついたという訳です。ところで与八郎殿の妻はどうしておられるか？」

新蔵は不吉な思いにとられ、血の跡のついてる妻の居間へ、急いで行き声をかけました。

「奥方、奥方。御無事でられるか？」

返事がない。新蔵はハツと思い、部屋に飛び込んでみましたが、すでに与八郎の妻の姿はなく、あたり一面にはおびたしい血が流れていました。

そしてかたわらの窓の障子に血で

「もどめなき契りのすえのあらわれて

ついにはかえるふるさとの空」

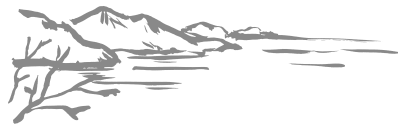
「おもいあらばそれがとも見ん比の里の

小池の水のあらんかぎり」

と書かれてあったそうです。

そしてこの血の跡は、岐阜県各務原おがせの池まで続いていたそうです。

こんな騒動があつて何年か過ぎ、与八郎の息子も成人し大人になりました。息子は、たとえ母親が山んばであろうとも、私にとつてはたった1人の母親なんだと、母の死を悼み菩提をとむらうため、余野に山んば寺、徳林寺を建立したといい伝えられています。



出典…大町教育委員会編「大町町のむかしばなし」より抜粋

の小牧・長久手の戦いでは、古方丈（住職の居室）と中門以外が焼失してしまつたそうです。

明治時代の1876（明治9）年、徳林寺境内に犬山城の黒門（旧大手道三の門）を移築しました。当時犬山城は、1873（明治6）年の廃城令により、天守以外の建造物が取り壊されたり、払い下げられたりしていました。払い下げられた門や櫓は、犬山城周辺の寺院などに現在も残っています。徳林寺の山門はその一つです。この山門と、小牧・長久手の戦いで焼失せずに残つたといわれている中門は、大町町指定文化財となっています。

物語の場面が広い範囲にわたって展開する「山姥物語」。大町町内のゆかりの地である徳林寺は、現在でも観ることができます。

郷土おおぐちに伝わる「山姥物語」を地域の子どもたちに広く知ってもらい、次世代へ繋ぐため、歴史民俗資料館では毎年、西保育園と連携し、「郷土を愛する心を育む活動」の一つとして、「山姥物語」を遊戯室で聴いてもらい、徳林寺にお散歩へ出かけます。子どもたちは、テレビやインターネットなどで目にする山姥とはちよつと違う、怖いだけではない、自分の子どもを愛する「母親」としての山姥の話を、真剣な眼差しで観たり聴いたりしています。

現在、大町町の魅力を発信するまちづくり団体、おおぐち宣伝部がプロデュースした「#大町町大好きフォトラリー」が開催中です。徳林寺もフォトスポットの一つになっていますので、この機会にぜひ皆さん訪れてみてください。



▲徳林寺へおさんぽ（西保育園）



▲郷土を愛する心を育む活動（西保育園）



▲#大町町大好き
フォトラリー
詳しくはこちらから